幼兒が喜び歌ふ歌（3）

葛原しげる

幼兒の歌ふ歌は、最も單純を悦ぶだけ、無駄のない表現を要します。ところが、世に多い童謠や、ことに童話の中には、どうでもよい説明が長くて、そこに無駄のある作品が多く見當ります。

私の庭の草花が
芽を出し　葉を出し　きのふから
すつかり大きくなりました
毎朝毎晩下駄はいて
私が水をやりますと
すぐに吸ひます　悦んで

これは、「お庭の草花」の第一節なのですが、此の中に、無駄があるとの評を、何かで讀んだことがあります、その無駄とは、「下駄はいて」の句なのです。

なる程、庭の草花に水をやりますのには、下駄でなくて、草履でも靴でもよく、また裸足でもよいのです。履物には關係はないのです。それだけ「下駄はいて」と斷はつてあるのは無駄だとの評には、同感でもあります。しかし、此の作の童圖は『歩きにくいのに、小さな足に大きな下駄を穿いて大きな如露を辛うじて兩手で持つて、水を草花にかけてやつてゐる』ほどの感じが先へ主にあつ

たのでした。前に、ヨヘイ君か、ユメ二君かの圖で、そんなのを見た心持もしてゐて、大きい下駄が目について仕方がなくて、一番にその句は、浮んで來たのでした。

しかし、そんな情趣は、只、「下駄はいて」とのみの短句の中には、盛られてゐませんから、「下駄はいて」を止めて、何かに替へようかとも、時々考へてゐますが、曲との結合が、あまりしつくりしてゐますので、まだ果さないでゐます。只今も考へてみたのですが、

「庭に出て」

でなければ

「いもうとと」、「おとうとと」

それとも

「姉さまと」

にしませうか。何うも

「兄さまと」

ではないやうで。又、全然、狙ひ所をかへて、

「一ばんに」

といへば、たとへば、おぢい様よりも早くか、子供心に誰よりも先んじて、私がやる所に、童心の跳躍もありはしますが。

もし、どこかの幼稚園で、此の句は脱きにして五つの音の歌詞を、子供さんたちに探がさして見て頂けませんでせうか。

マイアサ　マイバン　ララララ

ワタシ　ガ　ミヅ　ヲ　ヤリマスト

と歌つてきかして、「ララララ」の代りに、何かよい詞はありませんか、と、訊いてみて頂けないでせうか。

○

私共作者としても、舊作を教へて見たり、歌つて見たりして、意外な缺點を發見する事が時々あつて、困つてをります。作曲者梁田氏は、自作の

お人形を教へて見、歌つて見て、作つた當時よりは、又、別な氣持も働いて、ずゐ分困つて、私に、歌詞の改作を求めてくれました。次の二樣の中。どちらが、本當に善いでせうか。私は時々、舊作の方がよくはないかと感じたりします。勿論、どちらも、作曲者と協力して決定した歌詞ではありますけれど――。

（甲）

一、私の人形　おとなしく
　いつも　笑顔で　ニコ〳〵と
　まだ　一ぺんも　泣きませぬ
　　私が　お守をしますから

二、人形　よい子よ　おとなしく
　お目々を　つぶつて　お休みよ
　私は　いつも　ついてます
　　ねんねん　おころり　お人形

（乙）

一、人形　いい子よ　おとなしく
　いつも笑顔で　ニコ〳〵と
　まだ一ぺんも泣きませぬ
　　私が　お守をしますから

二、人形いい子よ　おとなしく
　お目々をつぶつて　おやすみよ
　はよはよはよ　おつむりよ
　　ねんねんおころり　お人形

此の最後の「ねん〳〵おころりお人形」は作曲者の詞です、そして

　　私は　いつも　ついてゐます

の母らしさの氣持を否定して

　　はよ〳〵〳〵　おつむりよ

と變へたいと主張したのも作曲者です。なるほど、その方が、待ち切れないあどけなさと分つて善い

とも考へますが、さういへば、第一節の　私がお守をしますから　も、母らしさです。これは、生かして、後のを、否定した方が善いでせうか。又

いつも笑顔で　ニコ〳〵と

は、重複してゐますね。「ニコ〳〵と」は　笑顔で」の事ですから――。

いつも　ひとりで　ニコ〳〵と

とでも直しませうか。

人形が、一度も泣かないことや、お目々をつぶつて寝よといふこと、それは共にあまり非常識ですか。いえ〳〵、幼児は對照物が何であれ、皆、自分と同じ生活をしてゐるもの、するものとのみ少しの不安もなく、信じてゐるのですから、幼児の世界の常識が、大人の常識と類を異にしてゐる所以でもあるのですから……。

これは、後に作りました　お客様　と同じく、私共が少年時代に習ひましたナショナルリーダー巻一の人形の病氣からヒントを得ましたもので、大人の眞似をしたがる幼児の心理を描いた積でゐます。

○

文部省唱歌の「小馬」の歌詞の、あまりに消極的であるのを、元氣のよい馬に對して、氣の毒に思ってゐる私の小さな緊張は、元氣百パーセントの歌を作らせました。

お馬　ヒン　ヒン
バカ　バカ　とべよ
山でも　坂でも　一とびに
とびこえ　とびこえ
勢こめて
進めよ　進めよ
日本のお馬

どこまでも元氣の善い馬です。「お前が進めば私

も進む」のではありません。進む進まぬが問題になるやうな事は毛頭ないのです。あくまで、ヒン〳〵バカ〳〵です。山でも坂でも一とびにです。「とびこえとびこえ」なのです。その上、一勢こめて」なのです。それこそ日本のお馬」ですもの。「お前が轉べば、私も轉ぶ」から、轉ばないやうにしろとか、「つまづくまいぞ」などと、そんな弱いことは、馬の本性ではないのです。あくまで、『前へ進め』です。

しかるに、「日本」が、ニホンになつてしまつて、どうしても、ニッポンの強い破裂音に歌へないのは、今に、殘念です。只、曲の工夫で、「二本」に聞えないだけ、悅んでゐます。近頃の本は、「ミス、ニホン」は結構として、「ミスター、ニホン」でなくて、「ミスター、ニッポン」でせうものを。

かくて、歌は曲に生き、曲は歌に生れます。さるにても、歌曲の六かしさ、また、その六かしさを突破した優越のうれしさ。

○

蛇足を加へてならないのは、繪ばかりでない。餘韻を尊ぶのは詩ばかりではない。曲に於ても、あるものは、ぶつきらぼうにまで、思ひきる。

然るに、幼兒唱歌の、あまり短かいのは、あつけなくて、もつと歌ひたがる心の芽を、ちよんぎる樣に殘忍であるといひます。

あれ　あれ
あそこに　鬼が來る
皆で、早く　かくれませう
帽子も
お靴も　見えないやうに

これは、初期の「かくれんぼ」の歌詞の凡てでした。『鬼ごつこ　や「かくれんぼ」は、最もシンプルな遊戯で、幼年期から、少年期までの子供が

等しく喜ぶもの、それだけ、これだけの歌では、幼児も、決して満足しないらしいといふので、その次の場面をも新作して加へる事にしましたところ、意外にも長いものになつてしまつて、今では却つて、覺えられなくはないかと心配してをります。

尙、第一節は、初期の原作とはかへました。

しつ　しつ　靜かに
おしづかに
皆で　はやく　かくれませう
帽子も　お靴も　見えないやうに

としまして、第二節以下を

二、おや〳〵　どこまで逃げたらう
どこまで　にげて　かくれたらう
何でも探して　すぐ見つけませう

三、それ〳〵　靜かに　鬼が來る
息をも　つかずに　しつかりと
かくれてゐるまに　それ〳〵鬼よ

四、とう〳〵見えたぞ　見つけたぞ
背中を出して　かくれてる
かくれてゐたのは　手と足ばかり

ともして見ましたが、これも作曲者と、いろ〳〵に歌つて見て、全然、別に、

二、そつそつ、そろ〳〵出かけませう
一二三四……皆さん　もういゝか
あちらに、こちらに、かくれたやうね

三、しつしつ、あれ〳〵鬼のこゑ
小さなこゑで「もういゝよ」
一生懸命、おさがしなさい

四、ほつほつ、ほら〳〵見えてゐる
あそこに、こゝに、見えてゐる
帽子も、お靴も、あんなに出して

五、面白いは、かくれんぼ
皆の好きな　かくれんぼ
ほんとに　をかしな　かくれんぼね

として、震災後の版は出したのでした。

いかに、幼兒も好きな遊戯で、よく知つてゐる事柄ばかりだとはいへ、覺えられますか知ら。

（以上、「大正幼年唱歌」第一集）